



四旬節

今こそ歩みを

速めるとき

教皇様の教

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済 発行所 ©1987 財団法人 精道教育促進協会 〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6 ☎(0797)31-3452

昔から灰の水曜日は、キリスト教の信心にとって大切な二つの行為によって特徴づけられています。すなわち、灰をつけることと断食。二つながら身体にかかわることですが、精神に影響を与え内的な現実をあらわす、意味深い行為です。食を断つ、情念を抑える、過ぎ去るこの世の空しい物事を避ける、これらは私たちがどんな状態にあるのかを曇りのない目で見抜くための助けとなります。罪人であり、神を必要とし、真の喜びの源である神に立ち戻らなければならぬ者：それが私たちの姿です。神は無限に善なる御方であって、過ぎ去るような御方ではありません。四旬節は「救いの時」。この間に私たちは自分自身に戻り、生活を築く基盤となるべき本当の価値を探しあてます。四旬節は黙想と深い内省の時。一人ひとり、勇気を出して、

自己改善に乗り出さなければなりません。いろいろな点で、福音の教えにそぐわない生活を送っていることに気づくでしょうから。つまりこの四旬節の自分は、自己の生活にキリスト教的な特徴をしるすことなのです。そのために、いつも頭をわずらわしている問題はさておき、何よりも霊的なことがらを第一に考えることが大切です。きょうから始まる四旬節には、とりわけ使徒ヤコブの次のような厳しい言葉に、すなおに耳を傾ける必要があります。「罪人よ、手を清めよ。二心の者よ、心を清めよ。自分のみじめさを思い知れ。泣け、うめきもだえよ。あなたたちの笑いを涙に、喜びを悲しみに変えよ。主の御前にへりくだれ。そうすれば主はあなたたちを高められる。」(ヤコブ4・8)

10) この呼びかけに無関心であってはなりません。私たち全員のことを言っているのですから。実際、本当に主に忠実であろうとすれば、それだけ熱意をこめて、私たちに向けられたこの使徒の言葉に耳を傾けることでしよう。四旬節は独特な方法で、私たち自身の弱さ、もろさを考えさせてくれます。すなわち、私たちは「粘土でできて」おり、地上のものには不確実であって、地上に幸福のともい、築こうとしても無駄である、ということとを。幸福は、至高の善、善そのものである神との真実で親しい関係のなかでのみ見出せるものですから。四旬節は、神から離れてしまっている今の状態を悔い改めよ、と促します。神に立ち返れ、と呼びかけているのです。神から離れたがために起こった悲しむべき事態に気づかなければなりません。

自ら問いかけるべき時

四旬節はまた、私たちにあって有益な節欲の念を起こさせてくれます。イエズスは、悲しむ人は幸せである(マテオ5・5)とおおせになりました。また他方、今「笑う者」と「飽き足りている者(ルカ6・25)は災いだ、と。なぜでしょうか。悔悛と償いを伴う悲しみは、救いと幸福につながっているからです。この世のものしか目に入らない愚か者の喜びは、遅かれ早かれ、幻滅と永遠の嘆き(マテオ8・12, 13・42参照)に行きつくことでしよう。四旬節は、自分自身の心に、私たちの感じる喜びがどのような性質のものか、どこから生まれてくるのかを、問いかけてみるのに良い機会です。神に心を寄せ、神に立ち返った結果生まれる喜びでしょうか。それとも、現世的な思いや考えにより、見せかけの満足感や慰めから生まれる喜びでしょうか。四旬節は、悔い改めて御父のあわれみに信頼せよ、御子のあがないの御業に一致せよ、と私たちを導きます。福音に耳を傾け、償いを果たすことによって悲しみは癒され、神の赦しを得て、科されるはずだった罰からも免れることができるでしょう。私たちと、そして隣人のためにも。聖パウロがすすめるように、キリスト信者はいつも喜んでいられるべきです。(テサロニケ1⑤・16) ところで、キリスト信者の喜びは、責任からの逃避ではありません。目の前のつかの間の喜びに、無感覚になるこ

ともありません。キリスト信者の喜びは、キリストの言葉を聞き、自分の心を見つめ直して、失っていた尊厳を再び取り戻すことにあります。四旬節は、こういう霊的な回復のためのまことに良い機会です。自分の本当の姿を知ることができずから。しかしそのためには、回心への福音の呼びかけを真剣に受けとめ、熱心に慈悲のわざに励まなければなりません。このようにして初めて私たちもあわれみを受けることができるとです。霊性の伝統から言えば、四旬節にすべき主なわざは三つ、すなわち、祈り、施し、断食です。祈りを通して、神により近づき一致するよう努力する。施しによって、寛大な心で兄弟姉妹の必要に気を配れるようになる。そして断食により、道徳的な修練と心の清めに対する確固たる決意を表わします。これらが信者の生活の重要な部分であり、四旬節の期間だけでなく常に不可欠なことは言うまでもありません。しかしながら、一年の典礼暦の中には特別に大事な時期があって、それはつまり、一層の霊的努力を重ねるよう要求されるべきときなのです。そのために、ミサ聖祭と聖書朗読は、大いなる照らしの光と満ちあふれる恩寵とを私たちに与えてくれます。今こそ歩みを速めるべき時、またそれができる時です。立ちどまってしまった人も、努力のたまものと成果を携え、旅を続ける絶好の機会です。(「恵みの時」(コリント②⑥・2参照)が、私たちにあって乗り多きものとなりますように。(二・十二)

根本にせまる

「私に立ちもどれ。」

1 主は預言者の口を借りてこう仰せになっています。預言者は「神の声」です。神の名によって語りかけます。冒頭に掲げたのは預言者ヨエルの言葉ですが、同時に教会が人々に向かつて発する言葉でもありません。教会も神御自身の言葉を語るからです。

「心をあげて、私に立ちもどれ。」
(ヨエル2・12)

神は一人称でお話になります。毎年、そして今年もまた、四旬節の最初の日、神は一人称で語りかけられます。だからこそ、四旬節は「テンプ・フォルテ」、すなわち力に満ちた時期と称されるのです。他の時期以上に神がお話になる時期。神御自身が人々に呼びかけ、人間の歴史の中にお入りになり、人の心の戸をお叩きになるのです。

「主は、御自分の地を慈しまれる。」
(ヨエル2・18)

これは人間への妬み深い愛。「私に立ちもどれ」とお呼びになる神は、人間の存在そのものの深みまでよく御存じです。人間が、神に立ち返らぬ限り、回心しない限り、満たされないことを、神は知っておられます。だからこそ、神の愛は「妬みぶかい」というのです。神の妬みぶかい愛は、灰の水曜日から聖土曜日まで続く四旬節・力に満ちた季節の基調となっています。

2 人間はどうせよと呼ばれているのでしようか。

神に向かうということは、とりもなおさず、自分自身を見つめることを意味します。自らの核、つまり心、あるいは良心に目を向けなければ、回心はあり得ないのです。

自分の部屋に入り、戸を閉めよ。
(マテオ6・6参照)

気を散らしながらでは、神への回心はおぼつかないでしょう。心を潜め、心を集中させなければなりません。自己の深みを、そして自らの崇高さを見出さなければならぬのです。

なぜ、深み、そして崇高さを見出せないのでしようか。なぜなら、この二点は人間に関する真理にかかわっているからです。目に見える周囲の世界のどんな被造物にもまさる高い地位が、人間には与えられています。他のものを従えて、地上を支配するよう定められています。これこそは、人間が創造主から受けた、最初の命令でありました。

それだけでなく、人間は他の被造物よりも深い存在です。出自から見ると、人間は何物も及びのつかぬ深みをもっています。人間は、他の被造物とは根本的に異なっていますから、被造物のみで自らを完成することができないのです。

人間は、見えるこの世では満たされることはありません。この世を支配しても、人間は見える世界より遙かに先へ進んだ存在です。「よし全世界をもうけても、命を失えば何の役に立つだろう。」(マテオ16・26)

3 人間は、自らによって満たされることがない……。

四旬節最初の、つまり灰の水曜日のメッセージに耳を傾けてください。強い言葉です。「覚えよ、汝は塵であって、塵に返る。」

どうすれば、私たちは自己を完成させることができるのでしようか。世間が滅びと死の定めを人間に移入するのであれば、人間はどのようにして世間を通して自己を完成することができるとしてしようか。世間は滅びと死の定めを徹底的に押しつけてきます。誰も逃れることはできないのです。

自らの心の奥に目を向けなければなりません。この世の事柄や被造物のうち自分に完成させるものを捜しても、とても見つけ得ないことを心にとめておく必要があるのです。部分的あるいはその場限りの満足を得ることはできません。しかし、しよせん長くは続きません。「塵に返るのであろう」と言われている通りです。

4 しっかりと聞いておくべきです。「不死の種子」をもつ私たちは、心してこの言葉に耳を傾けねばなりません。

その時こそ、なぜ神が「私に立ちもどれ」と仰せになったかがわかるのでしよう。

人よ、お前は私(神)なしには満たされることはない。私たちは神に立ち戻れないかぎり、自己を完成することができないのです。

「悔い改めよ」の本当の意味は、「福音を信じよ」、そして福音を伝え広めよ、ということなのです。

ところで福音とは、何のことなのでしょう。それは、救いに関する知らせ・神の妬み深い愛に関する真理のことです。

神の愛は、御独り子を犠牲とすることさえもいとわれなかった。「神は罪を知らなかったお方を私たちのために罪となされた。それは、

私たちがそのお方において神の正義とするためである。」(コリント②5・21)

神の愛は、これほどまでに妬み深いのです。

5 教会は神の名によって語りまします。本日の典礼の言葉はとりわけ「根本に迫る」ものです。

四旬節の始めに当たり、このような言葉があればこそ、私たちは、詩篇作者と共に、次のように宣言することができるとしてしようか。

「神よ、深い憐憫によって、私の心を消したまえ。」
私は自分のとがを認める、私の罪はつねに私の前にある。あなたに向かつて、私は罪を犯した。……

ああ神よ、私に清い心をつくりたまえ。(詩篇50・3、5、6、11)

自由—この神秘

天使の創造 ⑤

1 前回のテーマにひき続き、今回も、神の被造物である天使に関する信仰箇条について、探ってみたいと思います。とりわけ天使のうちのあるものが、人類に対する神の救いの御計画に背き、神に対立するものとなるのに用いたもの、すなわち自由の神秘について。

福音史家聖ルカは、弟子たちが初めて布教で得た実りを手に喜び

たのです。この点を考えてみれば、私たちはいつも戦いにふさわしい準備をととのえていなければならぬことがわかります。この戦いは、(黙示録12・7にあるように)救済史の最終段階における教会生命を特徴づけるものです。また、準備を整えるだけではありません。悪魔の影響力を基だしく誇張したり、あるいはその力を否定し軽視することで教会の

説教・講話・書簡等の抄訳

信仰を曲げようとする人々に対し、教会の眞の信仰を明かすこともできます。

天使に関する前回の要理は、聖書が明らかにし聖伝が伝える、サタンすなわち悪魔と呼ばれる墮落した天使・悪霊について、理解を深めるための準備となります。

2 天使のうちのある者は、神を拒み、その結果、「地獄へ落ちるもの」となった。この「墮落」は被造物である霊が、自ら自由に神とその御国を拒むという、根本的で取り返しのつかぬ決定をした結果でありました。悪魔は神の至上の権利を乱用し、救いの摂理と造られたもの全ての秩序を乱そうと試みたのです。

「あなたは神のようになる」あるいは「天人(神々)のようになる」(創世3:5参照)という人祖への言葉に、サタンのそのやり口が顕われています。こうして悪魔は、神への対立心、不従順・反抗心を、人間の心に吹き込みました。言わばこれこそが、悪魔の生き甲斐となったのです。

3 旧約聖書の創世の書の語る人間の墮落についての話は、サタンが人間を罪へ誘うために吹き込もうとする神への反目の態度に触れています。(創世3:5) ヨブの書にも、苦しむ人の心にサタンが反逆心を起こさせようと企む場面が記されています。(ヨブ1:11、2:5、7参照) また知恵の書も、サタンは罪と共に人類の歴史に入り込んだ死の職人であると言っています。(知恵2:24参照)

4 第四ラテラン公会議(一一一五年)において教会は、悪魔

(サタン)やその他の悪霊は「善いものとして造られたが、自らの自由意志で悪いものとなった」と教えました。実際ユダの手紙には、「自分たちの優先権を守らず、自分の席を捨てた天使たちを、主は永遠の鎖で縛り、偉大な日の審判まで暗闇の底にとどめられた」(ユダ6)と記されています。またペトロの第二の手紙では、悪魔は「罪を犯した天使たち」と呼ばれ、神は「ゆるさず闇の淵に捨てて審判の時まで見張らせた」(ペトロ②2:4)と。神が天使の犯した「罪をお赦しにならない」のは、明らかに、天使がいつまでも罪の状態にとどまっているからです。彼らは最初

動を認めさせないようあらゆる手段を捜し出す。自らの存在を否定させる術を心得ている。

の選択、つまり神である至高・完全な善についての真理に反対して神を拒む方を選択し、永久に「鎖に縛られる」ことになったのです。これを聖ヨハネは次のように記しています。「悪魔は始めから罪を犯しているからである」(ヨハネ①3:8)、「始めから人殺しだった、そして真理において固まっていなかった、彼の中心には真理がないからである」(ヨハネ8:44)と。

嘘つき・殺人者サタン

5 テキストにこのように記されていることから、サタンの罪の特質と重大性が理解できます。それは、知恵の光と啓示によって知る、完全な善、無限の愛、聖である神についての真理を拒んだ罪。なにより重大な罪です。完全な霊であり、自由意志を備え、神の近くにおり、天使としての鋭い知恵をもっていただけにその罪はことのほか重大なのです。神について知っていた真理を拒んで以来ずっと、永遠に「嘘つき、嘘の父」(ヨハネ8:44)となりました。それゆえサタンは神を根本的に否定しつづけ、他の被造物——神の似姿に造られたもの、特に人間——をだまし、神である善について嘘を吹き込みつづけます。創世の書には、サタンが(ヘビの姿で)神に関する嘘や偽りを人祖に吹き込もうとする様子が描写されています。神は御自分の権能を失うまいとして人類に制限を与えられた、などといううそを。(創世3:5) サタンは人間に、「神のように」なってそのくびきから逃れようと誘惑したのでした。

6 偽りにこりかたまったサタンは、聖ヨハネによれば「人殺し」であります。それは、最初から神御自らの内に宿る超自然の生命、そして神の似姿として造られた純粹な霊と人間、すなわち被造物の内に宿る超自然の生命を奪うもの。真理とともにある命、美に満ちた命、栄光と愛である超自然の命を奪おうとするものです。知恵の書の著者は記

7 人祖の犯した罪の結果として、墮落した天使は、ある程度まで、人間を支配する力を得るようになりました。これは教会が絶えず明言し、また宣言するところです。トリエント公会議は原罪に関する教義においてこのことを確認しましたが(カトリック教会公文書集⑤)、それはまた、洗礼の典礼において受洗者に向けられる、悪魔とその誘惑を捨てるかと問う印象的な表現を思い起こさせます。

8 聖書、とりわけ新約聖書によれば、サタンとその他の悪霊の支配力と影響力は、全世界に及ぶものです。キリストのたとえ話を思い出してみましよう。(世界という)畑と良い種、そして、人の心のうちにすでに「蒔かれていた」善を奪い去ろうとして、悪魔が麦の中に蒔いた悪い種。(マテオ13:38、39参照) さらにまた、警戒するよう忠告なさる箇所(マテオ26:41、ペトロ①5:8参照)、祈りと断食をおすすめる箇所(マテオ17:21参照)を心にためましよう。「この種のもは祈り(断食)によらずには追い出せぬ」(マルコ9:29)と、主は強い言葉で仰せになりました。サタンの仕業は第一に人間の想像力と能力を支配し、神の掟に背かせ、人間を悪へと誘います。サタンは、予め定められていた神の救いの摂理成就を妨げようと、イエズスをも試みたのです。(ルカ4:3、13参照)

す。悪魔は聖書の中で、一人として表わされる一方、一人ではないとも明言されています。ゲラサ地方で悪魔がイエズスに「大勢だからです」(マルコ5:9)と答えているように。最後の審判の箇所でもイエズスも、悪魔とsoの使いたち」(マテオ25:41)と表現なさっています。

またある時、悪魔は物質的なものばかりか人間のからだにまで影響を及ぼし、悪魔つき(マルコ5:2、9参照)にしてしまいます。この場合作用する異常な(外自然の)要因を見つけて出すのは簡単ではありません。教会は、多くの事柄を悪魔の直接的な行為とみなす傾向を軽率に支

今月の
おすすめ
十字架の道行(定価一〇〇〇円、二二〇〇円)
罪と告解(定価七五〇円、一三〇〇円)

不変の教え

持することはしませんが、自らの意志で善を及ぼし悪へと誘うことにかけて、サタンがすぐふる巧妙であることも否定できない事実なのです。

最後に、「世がすべて悪者の配下にある」(ヨハネ①5・19)

9 使徒聖ヨハネの印象的な言葉をつけ加えておきましょう。これは人類の歴史にサタンが存在することを示しています。悪魔の存在は、人間と社会が神から離れるとき、さらに決定的なものとなるわけです。

私は、勤労者の保護の聖人聖ヨセフを記念するため、ここにやって参りました。聖ヨセフは、仕事台のかわらで働くキリストの内に、日々の仕事の意味を見出した人です。聖ヨセフは働くキリスト信者の手本なのです。ヨセフにたずねれば、人間の労働について言われた神の御言葉の深い意味が理解できるでしょう。

「地に満ちて、地を支配せよ」(創世1・28)

「地は、おまえのために、いばらとあざみを生やし(…)おまえは、額に汗を流して、糧を得るだろう」(同3・18、19)

聖書の冒頭すなわち歴史の始まりにあたって、神はこのように断言なさいました。この言葉によって、人間の労働のドラマは力と真理に照らし出されます。人間が自己を完成させ、労働によって真にこの世をつかさどるようお命じになったことが、神の御言葉からわかります。また、罪のあとには逆転が起こり、賜として受けておきながら額に汗して糧を得なければならなくなる、つまり重荷となってしまうというこ

悪魔の影響は表にあらわれず、しかもまことに効果的に作用します。なんとすれば、知られないようにすることこそサタンの「関心事」なのです。サタンはこの世では自らの活動を認めさせないよう、あらゆる手段を捜し出します。自らの存在を否定させる術をサタンは心得ているのです。しかしながら、これが人間の自由意志と権利を奪い取ることを意味しているわけではありません。また、キリストの救いの業を挫折させるも

とが、前もって示されています。ドラマは、労働が呪いででもあるかのように、人間の敗北に終わるものではありません。それは、救いをもたらす神の愛、すなわち人間に向かって手をさしのべ、一度は挫折した計画を再び取り上げるよう促す神の愛が待っているからです。

これがその労働の真の姿、皆さんの歴史の中で、賞賛と感動のうちに

悪魔の影は表にあらわれず、しかもまことに効果的に作用します。なんとすれば、知られないようにすることこそサタンの「関心事」なのです。サタンはこの世では自らの活動を認めさせないよう、あらゆる手段を捜し出します。自らの存在を否定させる術をサタンは心得ているのです。しかしながら、これが人間の自由意志と権利を奪い取ることを意味しているわけではありません。また、キリストの救いの業を挫折させるも

聖ヨセフと仕事

実現した労働の姿です。

皆さんと、皆さんの祖先の方々がメキシコで成し遂げたことは、賞賛に値します。かつて一面の湖だった土地、山々に囲まれたこの土地で成しとげられた産業の発展。今日までの日々を思い返せば、賞賛は感動の思いに変わります。たいへんな労苦と長年にわたって示された勇氣、いくたびも切り抜けてきた困難な状況

悪魔の影響は表にあらわれず、しかもまことに効果的に作用します。なんとすれば、知られないようにすることこそサタンの「関心事」なのです。サタンはこの世では自らの活動を認めさせないよう、あらゆる手段を捜し出します。自らの存在を否定させる術をサタンは心得ているのです。しかしながら、これが人間の自由意志と権利を奪い取ることを意味しているわけではありません。また、キリストの救いの業を挫折させるも

のでもありません。むしろそれは、悪のもつ間の力と、罪のあがないのもつ力との間の葛藤、と言う方がふさわしいでしょう。主イエズスは受難に向かわれる前、ペトロにおおせになりました。「……シモン、サタンはあなたたちを麦のようにふるいにかけることができたが、私はあなたのために信仰がなくならぬようにと折った」(ルカ22・31)と。

このように考えてみれば、主イエズスが私たちに教えたようになった、御

近年には大地震……。世界各地に散らばる移民の人々の歩んだ苦しい道のりも、忘れるわけにはゆきません。それは、犠牲と苦しみであると同時に、尊厳と団結の経験でもありました。訓練はまだ終わっていません。社会全体に広がった失業の危機が、一部ではすでに現実のものとなりつつあります。

それでも皆さんは、決して希望を捨てることはないでしょう。神が皆さんと共におられるのですから。今も変わらなず、皆さんは感じておられるでしょう。すべての艱難において、皆さんと苦楽を共にする神の司祭たちを通して、神が積極的に皆さんの後押しをしてくださることを。(三十九)

アブラハムは「全く望みのないとき」にもなお信じたので、多くの民の祖」となった。「全く望みのないとき」、すなわち、人間的に見れば、息子が生まれるなど望むべくもなかったのに。

悪魔の影響は表にあらわれず、しかもまことに効果的に作用します。なんとすれば、知られないようにすることこそサタンの「関心事」なのです。サタンはこの世では自らの活動を認めさせないよう、あらゆる手段を捜し出します。自らの存在を否定させる術をサタンは心得ているのです。しかしながら、これが人間の自由意志と権利を奪い取ることを意味しているわけではありません。また、キリストの救いの業を挫折させるも

国が来るようにと願う祈りすなわち「主の祈り」が、他の多くの祈りと異なり、悪魔の誘惑から免れ、守られることを願って結びとされていることが、よく理解できるのではないのでしょうか。キリスト信者は父と子と聖霊に願い、御国が来るように祈り、信仰のうちに叫びます。誘惑からお守りください。悪魔と罪からお守りください。主よ、始めから不忠実だった者に誘惑され不信心に陥ることのないよう、お守りくださいと。

ヨセフは、希望が成就するであろうと信じていました。「聖霊によって、ナザレトの処女、つまり許婚のマリアが「同居するより前に」(マテオ1・18)身籠って母になることを信じたのです。

神の御使いがヨセフに告げた知らせは、次のとおりです。「ダビドの子ヨセフよ、ためらわずにマリアを妻として迎えよ。マリアは聖霊によって身ももっている。彼女は子を生むからその子をイエズスと名づけよ。なぜなら彼は罪から民を救う方だからである」(マテオ1・20、21)

このヨセフが受けた「天使の御告げ」は、マリアの受けた「御告げ」と、何とよく似ていることでしょうか。これらは互いに補い合っており、みことば、すなわち神の独り子の託身(受肉)の秘義を説き明かしています。

天使の言葉を信じたヨセフは、神と特別な契約を結びました。父になるという約束です。このときヨセフは、「彼は私に向かつて、(あなたは私の父)と呼ぶ」という詩篇(89)の言葉が、ヨセフ自身の生涯と、

その召命との関係で意味するところを理解したことでしょう。

「私の父」。これは実際イエズスがヨセフに対して使った言葉でした。それゆえ人々は、同様にイエズスのことを「大工の息子」(マテオ13・55)と呼んでいます。しかし、ヨセフ自身は、その呼び名が天地の創造主である永遠の御父に帰すべきものであると知っていたのです。

この上なく神聖な契約が取り交されたことをヨセフは知りました。ナザレトのつましい家には神の父性という測り知れない神秘が満ち、ヨセフ自身は神の最も近い守り手、忠実な召し使いとなったことも、承知していました。すなわち、主のはしためマリアの夫として。

ヨセフは毎日仕事台にむかうたびに、自分の仕事に家族の秘義と一体になっていることを感じました。その家族の中で、永遠の神の御子は子供の姿になったのです。

ヨセフは理解し、そして信じました。「信仰を持ち、希望のない時にも希望した」のです。(三・二十四)

悪魔の影響は表にあらわれず、しかもまことに効果的に作用します。なんとすれば、知られないようにすることこそサタンの「関心事」なのです。サタンはこの世では自らの活動を認めさせないよう、あらゆる手段を捜し出します。自らの存在を否定させる術をサタンは心得ているのです。しかしながら、これが人間の自由意志と権利を奪い取ることを意味しているわけではありません。また、キリストの救いの業を挫折させるも

お知らせ

下記のバックナンバーは在庫切れのため、御注文の方にはコピーで替えさせていただきます。御諒承ください。

1981年3・6・11月号 82年4・10・11月号 83年8月号 以上。

★

励ましの御言葉、御意見、御寄付等お寄せくださった方々に、紙面を借りて心から御礼申し上げます。

悪魔の影響は表にあらわれず、しかもまことに効果的に作用します。なんとすれば、知られないようにすることこそサタンの「関心事」なのです。サタンはこの世では自らの活動を認めさせないよう、あらゆる手段を捜し出します。自らの存在を否定させる術をサタンは心得ているのです。しかしながら、これが人間の自由意志と権利を奪い取ることを意味しているわけではありません。また、キリストの救いの業を挫折させるも

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月 十日発行 定価 一部七十円送料四十円 一年予約八〇〇円送料五〇〇円 二十部以上の一括購入なら送料不要 郵便振替 神戸 3-72393